

THE SOCIETY FOR RESEARCH IN ASIATIC MUSIC

社団法人 東洋音楽学会 会報 第54号

発行(社) 東洋音楽学会〔事務所〕〒110-0001 東京都台東区谷中5-9-25 第2八光ハウス201号
TEL.03-3823-5173 FAX.03-3823-5174 E-mail LEN03210@nifty.ne.jp

目次

第52回大会レポート	1	定例研究会発表募集	6
通常理事会・総会議決事項のお知らせ	5	定例研究会報告	6
会費納入のお願い	5	会員異動	7
小林幸男氏が沖縄文化協会賞(仲原善忠賞)を受賞	5	図書・資料等の受贈	9
第19回田邊賞アンケートのお願い	5	新刊書籍	9
『沖縄支部十周年記念誌』刊行のお知らせ	5	編集後記	10
定例研究会開催予定	6	第32回通常総会議事録(抄)・添付書類	11

第52回大会レポート

(2001年11月23日~25日 於沖縄県立芸術大学)
統一テーマ: アジア音楽における受容・変容・創造

琉球芸能鑑賞会、懇親会、田邊尚雄賞授賞式

支部発足を記念して、1993年に初めて沖縄で大会が開かれてから8年。今年の第52回大会は、ふたたび首里城にちかい沖縄県立芸術大学を会場に、11月23日(金)~25日(日)の3日間の日程で行われた。今年はとくに第4回中日音楽比較研究国際会議が同時開催されたこともあって、準備や運営のご苦労が察せられるが、両者の共催となった琉球芸能鑑賞会・懇親会ははじめ並行して行われた研究発表の数々からも、日本の南端であると同時にアジアを繋ぐ海域の拠点の一つでもある沖縄の位置が如実に感じられる大会となった。

8年前は那覇市内の別会場で催された芸能鑑賞会は、今回は学内に新設なった立派な奏楽堂で23日夜に行われた。番組は、1993年から復元が進められてきた琉球王府の御座楽、古典音楽・古典女踊・組踊・雑踊、中村司作曲の新作「游大陸」という新旧とりまぜた意欲的なもので、すべて沖縄県立芸大の学生と教官によって演じられたことも特筆される。

24日は、第18回田邊尚雄賞授賞式が公開講演会にひきつづいて奏楽堂で行われた。受賞された谷本一之・磯水絵両氏のスピーチは、受賞の喜びとともに、分野こそ違えそれぞれの長年にわたる研究への思いを語られて印象的であった。第32回通常総会をはさんでメルパルク沖縄に会場を移して行われた懇親会では、司会壇上をはじめあちらこちらで日本語と中国語が飛び交い、参加者一同にぎやかに盛り上がり、沖縄での一夜を堪能した。

(塚原康子)

研究発表A(11月24日)

研究発表Aでは沖縄大会にふさわしい歌や芸能の伝承に関する発表と活発な質疑が行われた。

「《みらぬ歌》から《スンカニ》へ 与那国島の葬送歌とシマウタ(土着的な伝承歌謡)の生成」(酒井正子)

みらぬ歌は与那国の葬送歌で、通夜の折一晚中死者にうたいかけられる。1950年代は野良仕事の歌や遊び歌としても盛んにうたわれていた。近年そうした伝承の場を失ってうたえる人が減少し、葬送の場でもみらぬ歌にフシがよく似たシマウタのスンカニに置きかえられる傾向にある。みらぬ歌がスンカニの原曲であるとの説は現地に根強い。1960年代に工工四記譜作成の際、意識的に両曲の差異化が行われたとも考えられ、様々な歌の場を循環しつつウタのジャンルが形成される過程が見て取れる。

(質問1) 済州島の葬送歌にも与那国島の例と共通点が多く見られるが、与那国島では歌の循環は何を理由に始まるのか。(答え) 葬儀でのみらぬ歌のフシが美しいので野原でも歌うようになった、みらぬ歌は儀礼や遊びの場から葬儀に取り込まれた、などの説がある。(質問2) 要旨中の「アニミズム的観念」という言葉は適切か。(答え) ここでは死者も生きているとの観念、死霊アニミズム(竹村精一による)の意味で用いた。

「本部半島地域のエイサー

伝承状況と各地域の特徴」(小林幸男、小林公江)

沖縄には、代表的芸能とされる太鼓踊りのエイサーの他に円陣の手踊りエイサーが行われる地域もある。本部半島では45ヶ字に手踊りエイサーの伝承があり、それらの曲には共通な音楽的特徴が見られる。一方地区ごとの違いも認められ、旧行政区域毎に青年団運動や行事との関連で普及したことも推論される。(伝承地各地区のレポートリイ、歌詞、踊りなどの特徴、相違、変化につ

いての詳細な分析結果は配布資料で示された。)

発表後の質問、コメントに関しては以下のとおり：

1) 手踊りエイサーでは現在は練習なしに誰でも踊るが、歌を知らないと変化のきっかけがわからない。かつては厳しい練習があった。2) 本土から檣が入ったことによって踊りの種類や行事の形態などに変化が起きた。3) 本来の家まわりのエイサーは現在もごく少数行われている。4) ウシデークとエイサーの関係は特に見られない。5) 琉球舞踊と手踊りエイサーの細かい手の動きには関連性が見られる。6) エイサーの研究では沖縄の歴史や本土との関係などの要素も考慮する必要がある。(岡崎淑子)

「奄美民謡歌手の誕生 70年代から80年代を中心に」
(島添貴美子)

島添貴美子氏の「奄美民謡歌手の誕生 70年代から80年代を中心に」は奄美民謡の再帰プロセスを1970年代～80年代の民謡歌手誕生に注目して分析し、グローバル化の観点から捉えようとしたものである。島添氏は歌手誕生のプロセスの変化を、歌遊びから民謡教室へという歌の学習の場の変化、民謡大会とその出場者のレコーディング、民謡大会のコンテスト化と全国大会への出場、という3点から捉え、例えばステージ演奏は既にグローバル化であり、歌手へのプロセスは技術的にはグローバルスタンダードに基づいて変化すると分析している。グローバル化に対する奄美人アイデンティティの不安定さから歌手は様々な試みを行っているが、中にはポップ歌手デビューという奇妙な現象もあると発表は締めくくられた。グローバル化という語の定義は発表の冒頭で行われたが、この語をはじめ幾つかの言葉の使い方に対し質問やコメントがなされた。今後も現地調査による研究を期待したいが、この研究にグローバル化という観点が必要かどうか、疑問が残った。

「戦後沖縄における民謡歌手の変容
知名定男を対象として」(高橋美樹)

高橋美樹氏の「戦後沖縄における民謡歌手の変容 知名定男を対象として」は、知名定男のライフヒストリーと音楽活動を分析し、異世代の登川誠仁、前川守賢との比較分析を通して戦後沖縄の民謡歌手の変容を明らかにしようとしたものである。高橋氏は登川、知名、前川という三世代の音楽活動を沖縄内への内向きと本土・外国への外向きという2つの発信スタイルから分析した後、音楽スタイルをレパートリイ、流派の創設、創作活動、レコーディング方法等9項目から詳細に検討して、活動志向を継承重視型、創造重視型という2つの型で捉えている。これにより知名は継承重視型、創造重視型の両方を合わせ持ち、いずれも内向き・外向きに発信していると結論づけられた。発表時間の制約があったためか、3人の活動の報告がやや表面的であった感が否めない。社会的な動向や他の民謡歌手の動向等も含め、幅広い視点からの研究を期待したい。(小林公江)

研究発表B

「奉る楽 - 古代日本の朝廷と神事における奏楽 -」
(平間充子)

奏楽堂ホールで、開会式直後に行われた平間充子氏による発表は、大学院博士課程で研鑽途上の課題をもとに、

意欲的な試みを果敢に提示するものであった。ただ、副題の示す範囲を扱いきるには、時間的な制約が大きすぎ、おそらく発表者も意を尽くしきれなかったろうと、司会役でもあった報告者としては、複雑である。大会プログラムで、先学の研究成果を分析した上で、独自の見解を提示すると述べ、当日配布用に大部の資料が用意されていたが、論旨にそって資料を追う時間がなかったことが悔やまれる。「恒祭」を「律令国家的な祭」とする思考に対して、「臨時祭」に「個々の天皇の祭」である特質を読みとろうとする発表者の意図は理解できたが、質疑の時間になって、磯水絵氏をはじめとする歴史研究の専門家から疑義が挟まれたのもその論拠についてであった。辛口の意見が今後の研鑽への起爆力を生み、今回の発表が論文充実への道標となることを期待したい。

「五代王処直墓の散楽図について」(山寺三知)
中国河北省出土の墳墓レリーフから奏楽の様子を丹念に考察した、音楽図像学の発表であった。視覚要素が重要で、書画カメラ(実物投影装置)も用意されていたが、照度と解像度が充分ではなく、発表者は残念な思いをされたと思う。時間の制約上、限界に近い早さで原稿を読み上げ、不自由な中で画像資料を活用し、手元に配布する資料は、いわゆるレジュメと資料を別立ての綴りに用意した(投影された画像の不鮮明さも、結果としては補えた)ことなど、発表に対して周到な配慮がされていたことを高く評価したい。分科会方式で時間を充分にとる時間割は、討議による研究の深まりを指向する選択であったと思われるが、中日音楽比較研究国際学会議も合わせると三会場となり、聴衆の絶対数が少なかったのが残念であった。中国の図像資料の考察であったので、中国側のコメントが望まれたが、増山賢治氏の補足によって救われた思いであった。(高橋美都)

「20世紀初頭の雅楽

ガイスバークの録音をめぐる」(寺内直子)

明治36(1903)年のF.ガイスバークによる録音資料から、当時の雅楽演奏とその録音の実態を明らかにしようとする発表で、ことに問題となったのは、(ア)演奏のテンポについて、(イ)管楽器のフレーズングについてである。(ア)寺内氏の研究では、冒頭の部分は現在とほとんど変わらないが付所以下は急激に速くなり、それは録音時間の制限によるものではないかということであった。これに対して谷本一之氏から、テンポが次第に速くなるのは当時の録音技術上の問題ではないかという重要な指摘があったが、寺内氏の返答は、ピッチにはあまり変化がないのでそうではないと思う、とのことであった。(イ)について寺内氏の研究では、フレーズの末尾を一息で吹く傾向があり、これは明治撰定譜および邦楽調査掛の雅楽五線譜の傾向と一致する、とのことであった。これに対してS.ネルソン氏から明治撰定譜をそのように読む解釈について異議が出され、また龍村から、当時一息で吹いたとするならば、今日それが細かく息づくようになった理由について意見を問われた。後者については、他の奏者の音とピッチを合わせようとしたり細部の美的表現にこだわる傾向が、洋楽の普及の影響もあって増大したためではないか、との答えがあった。

「現在のアメリカにおける日本音楽研究に
 ついての報告」(ヒュー・デ・フェランティ)
 アメリカの日本音楽研究の現状に関して、どの大学で
 誰がどういう研究をしているかという情報とともに発表
 者が指摘したのは、今日では伝統音楽研究よりも、ポピュ
 ラー音楽研究や洋楽受容の歴史、文化的アイデンティ
 ティ、文化の混交、ジェンダー論などの観点からの研究
 がさかんになりつつあるという事実である。その理由と
 して、語学のプレッシャーが比較的少ない、現代思想に
 おける理論が応用しやすい、就職に有利、などの点があ
 げられた。また、アニメや映画を含むパフォーマンス
 学研究的発展の可能性も指摘された。この発表を通じて
 報告者(龍村)は、従来型の地域研究の枠にはおさまら
 ない日本音楽研究が発展しつつある事情がよく理解でき
 た。ちなみに日本における異文化の音楽研究にも同様の傾
 向が見られる。世界共通の問題として、目先の就職や社
 会的名声を優先するために、伝統音楽の実践や構造的研
 究に力を注ぐ時間のかかる地道な研究がしだいに失われ
 つつあるという危惧も覚えた。(龍村あや子)

公開講演会

「異文化接触をめぐる歌と楽器の3つの問題」

(草野妙子)

「ベトナム宮廷音楽の活性化と研究者の役割」(徳丸吉彦)
 グローバルIT革命で幕をあげた21世紀。新しい世紀を
 迎えた初めての大会にあたり、二つの講演は20世紀の世
 界音楽交流をふりかえるとともに、われわれが今後、国
 や民族といった既存の枠組みをこえて、音楽文化をいか
 に共有するか、というメッセージを投げかけた。
 草野氏は、ご自身の世界各地における40年にわたる調
 査経験と、昨今の音楽界の状況をもとに、歌の国籍、
 楽器のグローバル化、映像と音楽の交叉の3点から、
 近現代のアジアにおける音楽の変遷を論じた。では、
 文部省唱歌「蛍の光」の元歌「Auld Lang Syne」を例に、
 欧米の歌が日本の唱歌教育を契機として、アジア諸国に
 深く浸透した状況を紹介した。近年さかんな文部省唱歌
 の源流研究に比べ、洋楽偏重の教育を受けた一般(日本)
 人の音楽文化を、変容と創造の両面から研究する意識は
 希薄である、との指摘もなされた。では、主にアジア
 伝統音楽の洋楽器受容をとりあげた。異文化受容と変
 容、再創造の端的な一例として、インド古典音楽でマ
 ンドリンがラーガを演奏する、興味深いVTRも紹介され
 た。
 では、20世紀(ことに'90年代以降)の映画やTVドラ
 マで、さまざまな音楽が、時代や地域、民族を超えて使
 用される現象に言及した。音楽を本来の脈絡から切り離
 し、組み合わせる試みは、20世紀後半にマスメディアが
 支配するインターカルチュラルな文脈で生じた。こうした
 傾向が、すでに大衆が一般メディアで無意識に接し得る
 ほどに普遍化したことを、参加者は講演を通じて改めて
 実感したことだろう。
 徳丸氏は、1995年から2000年まで、氏を中心に日本・
 ベトナム・韓国・中国の研究者が共同で推進した、ベ
 トナム宮廷音楽の活性化プロジェクトについて、映像資
 料を交えて報告を行った。1994年における活性化の提
 起から、日本の資金を投じたフエ国立大学芸術学部へ
 の宮廷音楽コース設置、幾多の困難をのりこえて、2000
 年に1期卒業生を送り出すまでの詳細は、大会プログラ
 ムに譲

る。この事業で研究者が果たした役割は、音楽が伝統
 として生きることを助け、生きた人間による音楽生活が
 続くよう「仕掛け」を作ることである。それは徳丸氏の
 持論fieldbackの主旨にも通じる。もとよりベトナム宮
 廷音楽はベトナム人自身が活性化すべきであり、変化を
 来たすのも伝承者の権限とみなせば、記録は目的になら
 ず、ある時期の様式に固定する必要もない。「仕掛け」
 は、ベトナム宮廷音楽家に東アジア圏の宮廷音楽の現状
 を伝え、継承の動機を高める事業も含んだ。氏の言葉
 を借りれば、伝承を促す研究者の役割とは「触媒」で
 ある。最後に、諸民族の音楽は人類の共有財産であり、
 その活性化に携わる研究者の国籍を問うべきでない、
 との主張がなされた。氏の日本人の学友がハワイに建
 設した「すばる天文台」を例に、音楽学も自然科学と
 同じく、国際的な貢献が必要と結んだ。(尾高暁子)

研究発表C(11月25日)

このセッションは、今日の民族音楽学的な関心に呼
 応する意欲的な発表がならんだ上に、寺田吉孝氏の巧
 みな司会もあいまって活発な質疑応答が展開され、
 非常に充実した内容となった。

「アイヌの音楽活動に関する一考察 標茶町塘路を

事例としたその保存・伝承・交流」(荏原小百合)

最初の荏原小百合氏(北海道大学大学院)の研究発表
 は、音構造の解明や楽器の伝播といった事柄が中心で
 あった従来のアイヌ音楽研究に対して、現在のアイヌ
 音楽文化伝承活動の実態について考察する興味深いも
 のであった。内容は大きく、神に感謝をささげながら
 菱の実を収穫する儀礼であるベカンベ祭り、ムックリ
 の演奏や製作技術の習得を目的とした民間の団体「あ
 そう会」を考察する2部にわかれていた。前者では、祭
 りを題材とした映画の制作により観光客やマスコミが
 おしよせたため、人々は祭りを実施しないという脱観
 光化の戦略をとったこと、そしてその結果神への祈り
 であるカムイノミをはじめとする祭りにかかわる歌
 舞の伝承が困難となったが、むしろ実施しないこと
 でベカンベ祭りは現在もなお人々の心の中にいき
 ており、いわば「みえない活動(伝承)」となってい
 ることが指摘された。後者では、口琴を伝承してい
 る他の地域との交流などを通じて、和人もふくめた
 メンバーが伝統を尊重しながらも「アイヌ音楽でた
 のしんでいる」という状況が、新しい音楽活動の
 方向性をしめすものとして提示された。質疑応答で
 は、たとえなくなっても真髄がいきつづければ良い
 とする、担い手の伝統に対する考え方に注目する意
 見等がだされた。

「伝統音楽伝承の新しいオーソリティ フィリピン・

コルディレラ地方を例に」(米野みちよ)

米野みちよ氏(フィリピン大学)は、フィリピン北
 部の山岳地域であるコルディレラ地方における長年
 にわたるフィールドワークを通じて、いわゆる名人と
 して尊敬をあつめる共同体の長老達と、伝統的な
 枠組みにはない現代的な社会組織の中で音楽活動
 の指導的な役割をになう人々(教師・地方官吏・
 セミプロ音楽家等)という、2系統の伝統音楽の
 「権威」が並存していることが指摘された。後
 者のいわゆる地元エリート達は、知識偏重の傾向

があり、外部のエリート（たとえば調査研究者）に対して、パタン的な回答を提出することが多いという。こうした新しい権威が台頭する背景として、学校教育などが新しい伝承の母体になりつつあることや、伝統音楽コンクールやタウン・フェスタ、諸団体による文化プログラムなど、何らかの形で国家がかかわる「伝統文化保存」活動に権威性がうつりつつあることがあげられた。質疑応答では、台頭する地元エリートに対して、外部のエリートである調査研究者はどのような立場をとることになるのかといった、アクチュアルな問題が討議された。

「ポストコロニアルとポップ化された宮廷音楽

ガーナ、ファンティ族の事例」(塚田健一)

塚田健一氏(広島市立大学)の研究発表は、ガーナ南部に居住するファンティの人々がガーナの独立後、宮廷音楽にポピュラー音楽をとり入れていくプロセスを明快にときあかしながら、ポストコロニアルの状況の中で、音楽がいかに社会や政治にかかわる様々な要素と複雑にからみながら展開していくかについてかたった、極めて刺激的な内容の発表であった。氏は宮廷太鼓合奏のフォントムフロムに、ガーナを中心として西アフリカで展開した、カリプソ・リズムなどを使用するポピュラー音楽ハイライフの要素がもちこまれた背景として、ガーナ独立後の文化政策に注目する。ここでは、「伝統文化教育の推進」がうたわれて強い伝統主義の方向をとりながらも、一方では国立舞踊団やそれを模倣した各地の Cultural Groupを通じて、国家的アイデンティティ形成をめざした「新しい音楽舞踊文化の創出」を推進する傾向がみられた。そして、前者の推進役となったガーナ大学音楽演劇学部の卒業生である教育行政官と後者のCultural Group出身の卓越した太鼓奏者、さらには宮廷楽団の先進的な楽長がであることにより、宮廷太鼓合奏に新しい音楽創造がうまれたのである。一般的には伝統を保持する傾向をもちやすい宮廷音楽においてこのような刷新が可能であった要因として、前述の文化政策の展開によって伝統をかえることへの社会的抵抗が少なく、前宮廷楽長までが伝統刷新の推進力になったという、ガーナのポストコロニアルな文化的状況があったことが指摘された。

(田井竜一)

研究発表D

『当流拾遺大成謳』の記譜法」(丹羽幸江)

元禄4年に刊行された上掛り謡本の記譜を調べ、当時の謡の実態にせまろうとする研究。下掛りの六徳本にすでに登場していた吟の区別(強い・弱い)の表記が、この謡本にも受け継がれた。ただし、発表者が行った諸本比較によれば、吟型の指示にはまだ流動性が残っており、両方の吟が複雑に入り交じっている。これは謡の音組織が変化していく過程の実態を反映したものであると、発表者は捉えた。「下の中音」の指示についても特徴がみられ、この謡本の記譜法が、現在とは異なる音組織を背景にしたものであることが示唆された。謡本の歴史的位置からも、その推論は妥当であると思われ、興味深い。横道萬里雄氏のコメントにあったように、現行流派間の異同までも視野にいれた、さらなる比較データの蓄積が望まれる。それと同時に、現行上演や現行用語に縛られずに、資料の用語をすなおに読みとる必要もある。本に印

刷された指示と書き込まれた「朱」との関係把握も、まだ未解決の課題であろう。地味だが、貴重な仕事であり、今後の発展に期待したい。(藤田隆則)

「浄瑠璃正本にみられる節譜の研究

宮古路系浄瑠璃正本を中心として」(渡邊浩子)

浄瑠璃系の正本にみられる詞章の右横に書き記された節譜(文字譜)から、各流派が創設された時期の音楽表現法を読み解いていくことを目的とした研究。まず、各時代の正本や稽古本を検討した結果、流派が確立し伝承に重点がおかれるようになってからは節譜の記入は少なくなっていくことから、節譜は流派創設時に創設者がつくりあげた表現法を強く外に向かってアピールするために記入されたものではなかったかという視点が新鮮であった。初世宮古路豊後豫を中心にその師である初世都一中、その弟子で常磐津節の創始者宮古路文字太夫、宮園節の創始者宮古路園八を中心とする、宮古路系浄瑠璃正本を、道行きの部分に特定して、三味線の調弦を示す節譜、合の手を示す節譜、曲の冒頭に示される節譜などについて詳細な分析、比較が行われ、節譜から読みとることができる各流派の特徴について論じられた。これに対して、正本の吟味が大切である、節譜という呼称が適当かどうかなどの意見がフロアーから出された。また司会者からは、音楽の研究ではいろいろな方向から音楽の解読をしていくことが大切であり、複雑な宮古路系浄瑠璃をどのように整理するかという方法の一つとして極めて興味深い研究であるというコメントがなされた。

(加藤富美子)

「琉球古典音楽・安富祖流<伊野波節>の手様譜の試み」

(新城巨)

三線演奏者の身体動作の内、特に弾絃の合間合間に行われる手の動き「手様」に焦点をあて、それを記号化して工工四に書き込む、発表者独自の試みが紹介された。技法として特に意識されない手の動き(手様)は、規範化されてはいないものの、節の長さや発声のタイミングを計る等、実際の演奏上一定の役割を果たしている。このことがビデオや実演などを通じて示された。新城氏考案の手様譜が稽古に役立つであろうと納得がいった点で、興味深く、今後の研究としての深まりが期待される発表だった。もちろん、新しい記譜の提示に伴う諸問題はあろう。はたして、質疑はその点に集中した。新城氏があげる手様名称は、伝統的用語なのか新城氏の造語なのか。それぞれの用語を音色、フレーズなどの既成カテゴリーに一对一対応させるのは難しいのではないか。手様が声楽と強く連動しているなら、声楽譜の充実をはかることの方が、手様譜の作成に先行すべきではないか。

(藤田隆則)

ラウンドテーブル「アジアにおける観光と芸能」

ラウンドテーブルは、司会の梅田英春氏より主旨と概観が呈示され、続いてタイ、インドネシア、沖縄の事例が示された。まず、櫻井哲男氏よりタイのレストランにおけるディナーショーが取り上げられ、古典的芸能が観光のなかで変化する様子を、簡素化、見せ物大衆化、芸質のレベル低下という点から指摘があり、脈絡変換と担い手自身の意識変化が述べられた。次に、皆川厚一氏が

らは、バリ島における事例が演奏家の視点で示された。バリ島では「神々と芸能の島」と言われるように、芸能が観光客をもてなす手段であり、観光用の芸能が積極的に行なわれる一方、聖なるものとして外の人に見せない芸能もあり、芸術教育なども踏まえて、観光だけで質の低下等に深刻にならない状態にあることが述べられた。続いて、梅田氏より沖縄の事例としてカリユシ芸能公演と玉泉洞王国村でのエイサーが取り上げられた。前者が行政主導型の舞踊公演で、結果として地元の人が多く観光客が少ないのに対して、後者は見物者の大半が観光客であり、誇張された所作などを含み、県民にはエイサーとして認知されないものとなっている状況が示された。以上を踏まえてホストの社会における受け取り方、オーセンシティの問題が事例に則して提起され、ゲストすなわち観光客の求めるのは何かという議論で、つくられたイメージが問題であり、それと現実がどのように対応し、あるいは資本や文化政策がどう関わるかという点へと展開した。全体として、司会の梅田氏による手際よい論の運びによって、観光と芸能という際限のない議論のなかで、沖縄という発信地をふまえて呈示できる問題の可能性を少しでも明らかにできたのではないかと思われる。もし、取えて今後の課題を付すならば、観光からみてはじめて捉えられる「アジア」という文化領域が浮き彫りにされること、そしてそのための問題設定にどのように収斂してゆくのか、ということかもしれない。

(永原惠三)

通常理事会・総会議決事項のお知らせ

2001年11月23日(金)に沖縄芸術大学にて第64回通常理事会が、翌24日(土)に同大学にて第32回通常総会が開催されました。以下に、これらの会議の議決事項のうち、特記すべきものをご紹介します。なお、通常総会の議決に関しては、後掲の総会議事録ならびに添付資料をご参照ください。

(1) 平成13年度(2001年度)の事業計画の件

後掲の添付資料5(「平成13年度(2001年度)事業計画」)の内容が総会にて可決承認されました。なお、関西支部が同年度の事業として予定していた関西支部会員のみを対象とした研究奨励金制度については、反対意見が総会出席者から出されたため、討議した結果、理事会にてさらに検討を行うこととし、同年度の事業計画には含めないことになりました。

(2) 制度改革の件

後掲の添付資料7(「施行細則改定案対照表」「社団法人東洋音楽学会支部規定(案)」および「社団法人東洋音楽学会常任委員会規程(案)」)の内容が総会にて可決承認されました。改革の内容については、会報第52号(2001年5月発行)2~3頁もご参照ください。

(3) 基本基金等の件

理事会にて、「東洋音楽学会基本基金規程」「研究推進事業基金規程」「田邊尚雄賞金規程」が可決承認されました。田邊尚雄賞金実施要領に関しては次回理事会に審

議を継続することになりました。

(4) 参事委嘱の件

理事会にて、鳥谷部輝彦氏を総務担当参事に委嘱する旨が承認されました。

会費納入のお願い

本学会の2001年度(2001年9月1日~2002年8月31日)学会費を未納の方に、請求書と振替用紙を同封いたしました(同封されてない方は、納入済みです)。請求書で未納金額をお確かめのうえ、早急に払い込みくださるようお願いいたします。学会費未納の場合、その年度の機関誌はお送りできません。

本状と行き違いに納入がありました場合はご容赦ください。

小林幸男氏が沖縄文化協会賞

(仲原善忠賞)を受賞

会員の小林幸男氏の沖縄研究に対し、第23回沖縄文化協会賞(仲原善忠賞)が授与されました。共著である『日本民謡大観(沖縄・奄美)沖縄諸島篇』をはじめ、奄美、沖縄、宮古・八重山の琉球文化圏の民俗音楽の研究に関する多くの成果が評価されたことによるものです。

第19回田邊賞アンケートのお願い

第19回田邊賞は、下記の要領で選考・授与されます。その選考対象となる会員の業績について、皆様からの情報を募集いたします。会員各位のご協力をお願いいたします。

(1) 選考委員: 大貫紀子、岡崎淑子、蒲生郷昭、小林責(委員長)、柘植元一以上5名

(2) 対象期間: 2001年1月1日~12月31日。

(3) アンケート締切り: 2002年2月10日必着

(4) アンケート記入事項: 著者名、著書名、発行年月日、発行所名、なお、論文の場合は、以上のほか、掲載誌名、巻次、編集者名、論文頁数を記入してください。

(5) アンケート送り先: 〒110-0001東京都台東区谷中5-9-25 第2八光ハウス201号室

(社)東洋音楽学会 第19回田邊尚雄賞選考委員会

『沖縄支部十周年記念誌』

刊行のお知らせ

沖縄支部では定例研究会の発表要旨と質疑記録を、毎回「通信」として発行してきましたが、去る11月23~25日に開催の東洋音楽学会大会を機に、各号をまとめて1冊として『東洋音楽学会沖縄地区通信・沖縄支部通信集』を刊行しました。沖縄内外、さまざまな研究者の往来と沖縄支部の歩みを一覧することができます。購入希望の方は、通信集代金1000円と送料310円の合計1310円を下記の口座に振込んでください。

振込先：郵便振替口座番号 01740-1-7318
口座名称：東洋音楽学会第52回大会実行委員会

第449回
2002年7月6日(土) 午後2時 4時30分
上野学園日本音楽資料室

定例研究会開催予定

第444回定例研究会
2002年2月2日(土) 午後2時 4時30分
上野学園日本音楽資料室
1.「バリの歌舞劇アルジャにおけるパフォーマンスの生成」(仮題) 増野 亜子
2.「朝鮮後期の吹鼓手と細楽手」(仮題) 植村 幸生(上越教育大学)

第445回定例研究会
2002年3月2日(土) 午後2時 4時30分
上野学園日本音楽資料室
卒論・修論発表

第446回定例研究会
2002年4月6日(土) 午後2時 4時30分
東京芸術大学音楽学部
卒論・修論発表

第447回定例研究会
(第70回日本音楽学会関東支部・東洋音楽学会合同例会)
2002年5月11日(土) 午後2時 5時
お茶の水女子大学
シンポジウム「幕末・明治期における洋楽受容」(仮題)
パネリスト未定

関西支部第207回定例研究会
とき：2002年2月9日(土) 14:00~17:00
ところ：神戸大学発達科学部 C-101号教室
(阪急六甲駅、JR 六甲道駅下車。どちらも神戸市バス36系統(鶴甲団地行き)に乗り、「神大発達科学部前」下車。)

研究発表
(1)「金井喜久子～生涯と作品について～」
法田 典子(神戸大学)
(2)「登場人物の役割と謡の旋律性～能を、平家、文楽、歌舞伎と比較する～」
藤田 隆則(大阪国際女子大学)

定例研究会発表募集

下記の定例研究会における研究発表(口頭)を募集します。発表希望者は、発表種別(研究発表、報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望日、氏名、所属機関、職名、連絡先(住所、電話、Fax、Email等)を明記の上、学会事務局宛お申し込み下さい。

第448回
2002年6月1日(土) 午後2時 4時30分
東京芸術大学音楽学部

定例研究会報告

第442回東洋音楽学会定例研究会
(2001年10月13日)
東京芸術大学音楽学部5-301教室

研究発表
室町時代宮中御懺法講の背景について
宸筆御八講から御懺法講へ
三島 暁子
(武蔵大学大学院博士後期課程)

(発表要旨)
天皇権威を示す場である宮中儀礼のなかで、楽がどのような役割を果たしたものが、天皇の追善仏事を例に考察するものである。別稿にて室町時代宮中追善儀礼としての宸筆御八講を考察し、天皇書写の宸筆法華經を用い、清涼殿で開催される先帝追善のそれが、天皇権威誇示の場として機能し、全盛の武家御八講に対する厳儀であったことを確認している。その要因として法会最高潮の場「薪の行道」が重要であった訳だが、財政的困難により「薪の行道」が省略されると共に、法会の追全対象が母后へと変化する過程も明らかである。代わって、先帝供養としては御懺法講が行われることから、宸筆御八講が果たした役割が、御懺法講に移行したのではないかと予測できるのである。法華八講と御懺法講は共に『法華經』に基づく法会であるが、宮中の先帝供養儀としての両者の関係には言及がなく、室町時期になぜ宮中開催の開始があるかという点は明かではない。財政困難が宸筆御八講から御懺法講への移行の一因ではあるが、内々の開催として始められた御懺法講を宮中開催の厳儀とするためには、新たな荘嚴の要素が必要となる。この背景には、「薪の行道」の風流過差・視覚的興奮から、聴覚的な興奮へ(天皇の楽器御所作を次第に取り込む)ともいえる価値の転換が考えられるのである。室町後期には「文和の御かど(後光厳)のおほんとき、はじめて楽を奏しあはせられしかば」と、御懺法講は後光厳天皇が主導したとする解釈があるが、後光厳は室町天皇家の楽の流れを変えた人物として注目できる。後光厳の御懺法講関与の背景、以降開催の背景を個別検討することで、室町の宮中追善儀礼が天皇と將軍家との権威のかけひきの場、象徴として用いられ、御懺法講はその過程で興された法会と捉えることが可能である点を報告する。

研究発表
『源氏物語』の音楽 - その注釈をめぐって -
磯 水絵(二松学舎大学)
石田百合子氏が「東洋音楽研究」第一八号(昭和四〇年)の「源氏物語の音楽」中に、『源氏物語』について「作者は、一時代前の、延喜天曆期(九〇一~九五六)の音楽を描いている」と、また「平安時代のことに關して、極めてわずかな知識しか持たない我々は、このせつかくの作者の用意も気がつかずに過ぎてしまうことが多

—

- 『民俗芸能研究』第32,33号 民俗芸能学会
『日本音楽史研究』第3号 上野学園日本音楽資料室
『インド音楽研究』第7号 インド音楽研究会
『国立民族学博物館国内資料調査委員 調査報告集21』
(CD-ROM) 国立民族学博物館情報企画課
『明治 薩摩琵琶歌』島津正著 ペリかん社

新刊書籍

- 『歌川派の浮世絵と江戸出版界 役者絵を中心に』
藤沢茜著、勉誠出版、¥31,000
『絵の語る歌謡史』小野恭靖著、和泉書院、¥2,600
『大江戸歌舞伎はこんなもの』橋本治著、筑摩書房、
¥1,800
『お神楽 日本列島の闇夜を揺るがす』平凡社、¥2,700
『カクレキリシタン オラシヨ-魂の通奏低音』宮崎賢太
郎著、長崎新聞社、¥1,143
『歌舞伎の表現をさぐる』服部幸雄編、演劇出版社、
¥3,619
『観世寿夫世阿弥を読む』観世寿夫著、平凡社、¥1,300
『記紀神話と王権の祭り』水林彪著、岩波書店、¥11,000
『杵屋正邦における邦楽の解体と再構築』吉崎清富著、
出版芸術社、¥6,300
『京都舞妓と芸妓の奥座敷』相原恭子著、文芸春秋、¥700
『組踊への招待』矢野輝雄著、琉球新報社、¥3,800
『芸能の足跡 郡司正勝遺稿集』郡司正勝著、柏書房、
¥3,800
『芸能白書 数字にみる日本の芸能 2001』芸能文化情
報センター編、丸善出版事業部、¥7,000
『三味線ランナー 天才・上妻宏光-世界を駆ける津軽三
味線』本間章子著、東京書籍、¥1,600
『神道と祭りの伝統』茂木貞純著、神社新報社、¥1,000
『神話と祭りと芸能の山陰路』石塚尊俊著、ワン・ライ
ン、¥1,900
『実践「和楽器」入門 伝統音楽の知識と箏・三味線・
尺八の演奏の基本』音楽文化創造伝統音楽委員会監修、
ヤマハミュージックメディア、¥1,700
『女性芸能の源流 傀儡子・曲舞・白拍子』脇田晴子著、
角川書店、¥1,200
『住吉大社の祭事記 登野城弘写真集』登野城弘著、東
方出版、¥1,500
『世界は音に満ちている 音楽人類学の冒険』塚田健一
著、新書館、¥1,900
『中世音楽史論叢』福島和夫編、和泉書院、¥8,000
『痛快!歌舞伎学 Amazing study of kabuki』小山観
翁著、集英社、¥1,900
『においとひびき 日本と中国の美意識をたずねて』朱
捷著、白水社、¥2,200
『日中芸能史研究』越智重明著、中国書店、¥8,800
『日本音楽の授業 伝統音楽のこころを大切にでき
く・うたう・おどる・かなでる・つくる』山内雅子著、
音楽之友社、¥1,700
『日本音楽を学校で教えるということ』音楽之友社、
¥2,000
『日本の祭りを読み解く』真野俊和著、吉川弘文館、
¥1,700
『日本民謡選集 全歌詞ルビ付』千藤幸蔵編著、ドレミ
楽譜出版社、¥1,500
『日本舞踊ハンドブック』藤田洋著、三省堂、¥1,650

住所・所属等に変更ありましたら事務局までご連絡
ください。(機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用
はがき、またはファクス、E-mail等でも結構です)

改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添
えください。(複数表記される場合、どちらを主な表
記にするのか等)

事務局に登録はされても、公表を希望されない情報等
がある場合には、その旨明記してください。

図書・資料等の受贈

(2001年8月~2001年12月、到着順)

- 『MLAJ Newsletter』vol.22 No.1 音楽図書館協議会
『白い国の詩』8,9,10,11,12月号
東北電力(株)地域交流部
『月刊みんぱく』8,9,10,11,12月号 国立民族学博物館
『楽道』8,9,10,11,12月号 正派邦楽会
『アジアセンターニュース』No.18
国際交流基金アジアセンター
『音楽学』第47巻1号
『日本音楽学会会報』第53号 日本音楽学会
『ぎふ民俗音楽』第52,53号 岐阜県民俗音楽学会
『アイヌ民族文化研究センターだより』No.15
『山田秀三文庫 文書資料目録II 地図資料』
『ポン カンピソシ』7(芸能)
北海道立アイヌ民族文化研究センター

- 『能の四季』堀上謙写真、たちばな出版、¥3,620
- 『福森久助脚本集』福森久助著、国書刊行会、¥6,400
- 『文楽・女方ひとすじ おつるから政岡まで』桐竹紋寿著、東方出版、¥2,000
- 『文楽に連れてって!』田中マリコ著、青弓社、¥1,600
- 『平家物語の形成と琵琶法師』砂川博著、おうふう、¥15,000
- 『祭に乾杯 につぼん祭紀行』森井禎紹著、日本写真企画、¥3,800
- 『美空ひばりと日本人』山折哲雄著、現代書館、¥1,800
- 『民俗音楽の底力 群馬県モデルを中心に』日本民俗音楽学会編、勉誠出版、¥2,500
- 『民俗の原風景 埼玉イエのまつり・ムラの祭り』大館勝治著、朝日新聞社、¥2,500
- 『明治薩摩琵琶歌』島津正著、ペリかん社、¥4,200
- 『やさしく学べる和太鼓教本』河乃裕季著、汐文社、¥1,500
- 『大和の神祭祀』田中昭三編著、近代文芸社、¥2,300

編集後記

第 52 回大会の開催が時期的に遅かったため、本号の発行が遅れました。どうぞご理解いただきますよう、よろしく願いいたします。

号末に、総会議事録と添付資料を掲載しています。本文中の通常理事会・総会議決事項のお知らせと合わせてご参照ください。

本号より参事の鳥谷部輝彦さんが会報編集委員会に加わりました。どうぞよろしく願いいたします。

次号は、4 月理事会における議決事項および大会予告などを中心に、5 月 10 日頃の発行予定です。

会報編集委員会

理事：加藤富美子、野川美穂子

参事：太田暁子、小塩さとみ、小野美紀子、北岡朱実、竹内有一、鳥谷部輝彦、福田千絵、前島美保、前原恵美、増野亜子、松村智郁子、三上康子

第 32 回通常総会議事録 (抄)

・添付書類

1. 日時 : 平成 13 (2001) 年 11 月 24 日 (土)
16:20 ~ 18:00

2. 場所 : 沖縄県立芸術大学奏楽堂ホール

3. 出席者 : 243 名 (委任状出席 179 名を含む)

[備考] 正会員数 724 名、定足数 242 名。

4. 議事事項と審議の経過および結果

定款第 25 条により柘植元一会長が議長となり、定数を確認の上、開会を宣言した。

次いで定款施行細則第 17 条により副議長選出を要請し、岡崎淑子、永原恵三両氏が選出された。次いで以下の議事を審議した。

第 1 号議案 平成 12 年度 (2000 年度) 事業報告の件

植村幸生理事 (総務担当) が「平成 12 年度 (2000 年度) 事業報告」(添付書類 1) について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第 2 号議案 平成 12 年度 (2000 年度) 収支決算の件

塚原康子理事 (経理担当) が「平成 12 年度 (2000 年度) 収支決算書」および「第 51 回大会特別会計収支計算書」(添付書類 2) について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第 3 号議案 平成 13 年 (2001 年) 8 月 31 日現在貸借対照表・財産目録の件

塚原康子理事が「平成 13 年 (2001 年) 8 月 31 日現在貸借対照表」、「財産目録」および「正味財産増減計算書」(添付書類 3) について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第 4 号議案 平成 13 年 (2001 年) 8 月 31 日現在会員異動状況の件

植村幸生理事が「会員の異動状況」(添付書類 4) について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。また、徳丸吉彦監事が「監査報告書」(添付書類 8) を朗読説明した。

第 5 号議案 平成 13 年度 (2001 年度) 事業計画の件

植村幸生理事が「平成 13 年度 (2001 年度) 事業計画」(添付書類 5) について説明を行い、また関西支部が同年度事業として「研究奨励金」制度を設ける予定である旨、補足説明を行ったところ、研究奨励金制度の実施に対する反対意見が出席者から出された。議長がこれを受け、平成 13 年度 (2001 年度) 事業計画のうち研究奨励金制度については理事会にてさらに検討を行い、同年度の事業計画には含めないものとする修正提案を行い、この修正提案の承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第 6 号議案 平成 13 年度 (2001 年度) 収支予算の件

塚原康子理事が「第 6 号議案 平成 13 年度 (2001 年度) 収支予算書」(添付書類 6) について説明を行った。議長がこの承認を議場に諮ったところ、満場一致で可決承認された。

第 7 号議案 制度等改革案の件

塚田健一理事 (改革検討委員会委員長) が、「施行細則改定案対照表」、「社団法人東洋音楽学会支部規定 (案)」および「社団法人東洋音楽学会常任委員会規程 (案)」(添付書類 7) を説明し、定款施行細則の変更および両規程の新規制定を提案した。蒲生美津子、瀬戸宏、蒲生郷昭、磯水絵各会員が改革後の制度について質問を行い、それに塚田理事が回答した後、議長がこの承認を議場に諮ったところ、賛成多数で可決承認された。

第 8 号議案 その他

議長が議場に対して発議を促したが、その他の議案は出されなかった。

議長は以上で本日の議事はすべて終了した旨発言し、議事録に署名すべき出席者代表として植村幸生、永原恵三の二名を指名して一同の了解を得たので、閉会を宣言した。

(以下、添付書類)

【添付書類 1】

平成 12 年度 (2000 年度) 事業報告

(自平成 12 年 9 月 1 日 至平成 13 年 8 月 31 日)

(2000 年)

(2001 年)

1. 事業の状況

[1] 研究発表会および学術講演会の開催 (定款第 5 条 1)

(1) 公開講演会の実施 (定款施行細則第 3 条 1)

・日時 2000 年 10 月 7 日

・会場 金沢市文化ホール

・課題 「『雪』のわらべ唄 - 白山麓から能登半島へ」
「歌謡劇の伝承」

・備考 日本歌謡学会と合同

(2) 研究発表大会の実施 (定款施行細則第 3 条 2)

・日時 2000 年 10 月 8 日

・会場 金沢市文化ホール

・発表件数 9 件

・備考 日本歌謡学会と合同

(3) 次年度大会の準備

・日時 2001 年 11 月 23 日 - 25 日

・会場 沖縄県立芸術大学

(4) 定例研究会

本部 (定款施行細則第 3 条 3)

・回数 8 回 (第 434 回 ~ 第 441 回、11・12・2・3・4・5・6・7 月)

・会場 上野学園日本音楽資料室、お茶の水女子大学、東京藝術大学音楽学部、その他

・内容 研究発表、研究報告、講演、自由討論、卒業論文・修士論文発表

・備考 12 月・5 月の定例研究会は、日本音楽学会関東支部との合同

関西支部 (支部規約第 2 条)

・回数 5 回 (第 200 回 ~ 第 204 回、9・10・2・4・5 月)

・会場 国立民族学博物館、やしる鴨川の里その他

・内容 研究発表、シンポジウム、講演、見学、卒業論文発表、その他

沖縄支部 (支部規約第 2 条)

・回数 3 回 (第 30 ~ 32 回、12・3・7 月)

- ・会場 沖縄県立芸術大学
- ・内容 調査報告、研究発表、講演、卒業論文発表

[2]学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)

(5)機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款第5条2)
第66号の編集・刊行

- ・内容 会員の論文、研究ノート、調査報告、研究動向、通信、書評・視聴覚資料評・書籍紹介、大会・研究会記録、田邊賞記録

(6)会報の刊行

『東洋音楽学会会報』

- ・第50号(9月10日)、第51号(1月10日)、第52号(5月10日)
 - ・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、新刊図書、視聴覚資料紹介、会員消息
- 『支部だより』
- ・第39号(1月15日)、第40号(3月30日)、第41号(8月10日)
 - ・内容 定例研究会案内、定例研究会記録、研究会情報、その他
- 『沖縄支部通信』
- ・第26号(12月1日)、第27号(3月10日)、第28号(7月7日)
 - ・内容 定例研究会案内、定例研究会発表要旨、質疑応答記録

[3]関連学協会との連絡および協力(定款第5条3)

(7)日本学術会議への協力

会員山口修氏を芸術学研究連絡委員会委員として派遣

(8)ユネスコ国際音楽評議会(I M C)日本国内委員会への参加

会員柘植元一氏を理事として派遣

(9)音楽文献目録委員会への参加

会員梅田英春、高桑いづみ、蒲生郷昭の各氏を委員として派遣

(10)国際伝統音楽学会(I C T M)への協力

日本国内委員会として加盟

[4]研究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)

(11)「田邊尚雄賞」

第17回田邊尚雄賞の授賞

- ・受賞者 岸辺成雄氏
- ・授賞対象 「江戸時代の琴士物語」『楽道』第618~698号、正派邦楽会、1993年4月~1999年12月発行
- ・授賞日 2000年10月7日
- ・賞金 100,000円
- 第18回田邊尚雄賞の選考と発表
- ・受賞者 谷本一之氏、磯水絵氏
- ・授賞対象 『アイヌ絵を聴く』北海道大学図書刊行会
2000年6月発行
『説話と音楽伝承』和泉書院
2000年12月発行

[5]研究および調査(定款第5条5)

(12)国内または国外における学術調査および研究
とくになし

[6]その他目的を達成するために必要な事項

(定款第5条6)

(13)東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供

【添付書類5】

平成13年度(2001年度)事業計画

(自平成13年9月1日 至平成14年8月31日)
(2001年) (2002年)

[1]研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1)公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)

- ・日時 2001年11月24日
- ・会場 沖縄県立芸術大学
- ・課題 「異文化接触をめぐる歌と楽器の3つの問題」
「ベトナム宮廷音楽の活性化と研究者の役割」
- ・備考 第4回中日音楽比較研究国際学術会議と合同

(2)研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)

- ・日時 2001年11月24日-25日

・会場 沖縄県立芸術大学

・発表件数 14件

(3)琉球芸能鑑賞会の開催

- ・日時 2001年11月23日

・会場 沖縄県立芸術大学奏楽堂

・備考 第4回中日音楽比較研究国際学術会議と合同

(4)次年度大会の準備

未定

(5)定例研究会

本部(定款施行細則第3条3)

- ・回数 8回(10・12・2・3・4・5・6・7月)

・会場 上野学園日本音楽資料室、東京藝術大学音楽学部、その他

・内容 研究発表、調査報告、講演、卒業論文・修士論文発表、その他

・備考 12月・5月の定例研究会は、日本音楽学会関東支部との合同

関西支部(支部規約第2条)

- ・回数 5回(9・10・2・4・6月)

・会場 京都市立芸術大学、大阪大学

・内容 研究発表、見学会、その他

沖縄支部(支部規約第2条)

- ・回数 3回(11・2・6月)

・会場 沖縄県立芸術大学

・内容 研究発表、講演、卒業論文・修士論文発表、調査報告、その他

[2]会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)

(6)機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款第5条2)

・第67号の編集・刊行

・内容 会員の論文、研究ノート、調査報告、研究動向、通信、書評・視聴覚資料評・書籍紹介、大会・研究会記録、田邊賞記録

(7)会報の刊行

『東洋音楽学会会報』年3回(9月、1月、5月)

・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、田邊賞発表、図書・視聴覚資料紹介、会員消息

『支部だより』年3回(12月、3月、8月)

・内容 関西支部定例研究会の開催案内、定例研究会記録、研究活動ニュース、支部会員への諸通知、その他
『沖縄支部通信』年3回

- ・内容 例会案内、例会発表要旨と質疑応答記録、その他

[3]連学協会との連絡および協力(定款第5条3)

- (8)日本学会議への協力
会員1名を芸術学研究連絡委員会委員として派遣
- (9)ユネスコ国際音楽評議会(IMC)日本国内委員会への参加
会員1名を理事として派遣
- (10)音楽文献目録委員会への参加
会員3名を委員として派遣
- (11)国際伝統音楽学会(ICTM)への協力
日本国内委員会として加盟

[4]究の奨励および研究業績の表彰(定款第5条4)

- (12)「田邊尚雄賞」
第18回田邊尚雄賞の授賞
・日時 2001年11月24日
・受賞者および授賞対象
谷本一之氏『アイヌ絵を聴く』
(北海道大学図書刊行会 2000年6月発行)
磯水絵氏『説話と音楽伝承』
(和泉書院 2000年12月発行)
第19回田邊尚雄賞の選考と発表
(2002年4月予定)

[5]究および調査(定款第5条5)

- (13)国内または国外における学術調査および研究
とくになし

[6]その他目的を達成するために必要な事項

(定款第5条6)

- (14)東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供

附則

1 この規程は、平成 年 月 日から施行する。

【添付書類 8】

社団法人東洋音楽学会会長 柘植元一殿
監査報告書

社団法人東洋音楽学会の平成12年度財産の状況ならびに、業務執行の状況を監査しましたが、健全に運営されていることを認めます。

平成13年9月28日

監事 徳丸吉彦
監事 山口 修

(収支決算)

(貸借対照表)

(財産目録)

正味財産増減計算書

